
土の神ライダー 序章

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土の神ライドー 序章

【Nコード】

N8838X

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

第2章ウエストホース偏序章

第2の神の遣い

火の神インフェルノはある心配をしていた。「強情な神か。奴はどうしているんだらうな。土の神ライダー」

その星の西の果てにウエストホースと呼ばれる島があった。別名、獣人島と呼ばれたその島は、ならず者が横行し、賞金首や盗賊がまかり通る島だった。

植物は育たず、地平線の彼方まで砂漠が広がり、獣人達はそんな世界でくらしていた。

彼方より馬に乗り駆ける男あり。彼の名は、レオ・バレッタ。この島で保安官をやっていた。

「デ、今日はどんな奴を裁けば良いんだ。ボス」「酒場に用心棒のボスコがいる。賞金1万の極悪人だ。こんな輩がいるから治安がよくならねーんだ。頼むぜ。レオ」「アア。金はいつもの所にな」「お前も相変わらず抜け目無いな。たまにやーマケテくれよ。こつちは子供の養育費も……………」「ボス。関係無いぜ俺は。マケテほし

けりや俺に頼まねーこつたな」「わかったわかった。やってくれるな？お前しかいないんだ。皆ビビって逃げ出したよ」「ハン。ママのミルクでも飲んでてくりゃ良いんだ。通信切るぜ。探知される可能性もあるからな」

馬を降り酒場に向かうレオ・バレッタ。茶色いマントに黒いテングロンハット。顔に白髭を蓄えた男。賞金首の間では悪魔と恐れられた男。それが奴だった。

酒場の扉を開け、カウンターにつくれオ。賑やかなホールが彼の登場に静まり返る。

「マスター。酒をくれ」レオはポケットから金貨を放り、カウンターの上でクルクル回す。

パンツとカウンターの金貨を潰し、ブツブツ言いながら金貨をよく見るマスター。

胸のポケットからボスコの写真をチラッと見せるレオ。

親指を立て、あそこだと合図するマスター。

レオはチラッと写真を見て、ボスコの前に仁王立ちする。

「用心棒のボスコだな？」「ゲヘヘ……………だつたら何だよ？保安官さんよー。この島じゃ、やりたい放題。たりめえだろ？」「イヤ。俺の目の届かない所でやるには勝手だがな」「野郎！ぶっころしてヤラア！」ボスコはビール瓶で殴りかかる。残像を残しテープルに手を付き、クルツと旋回するレオ。バーンとジャンプし、マントをたなびかせ、腰から二丁拳銃を回しながら構える。パーン！パーン！ボスコの脇を銃弾がかすめ、腰を抜かす。

「ヒー！ヒー！殺すな！わかった！わかった」「さあ、盗んだ金を返して貰おうか？」「金？知らねーよ！」額に二丁拳銃を当てもう一度聞く。「金だ」「ヒー……………ワツ……………わかったよ。ホラ。見逃してくれよ。返すから」レオは茶色いきんちやくを受けとる。きんちやくをひっくり返し中を確認する。「ウン。丁度だ。マスター。今日は俺の奢りだ。パーツとやってくれ、これで」レオはきんちやくをマスターに投げる。

「イヤーありがてえレオさん。皆、今日はスターの奢りだ好きにやるうぜー！」指笛や歓声が酒場を包み込む。「さすがすげーやー！」「レオさん。ありがとよ」「ワーワー

気絶したボスコを担ぎ上げ酒場を後にするレオ・バレッタ。

「ナ―ニ―！盗んだ金を酒場の客に奢ったとー！」「そうそう。悪かったか？」「レオ！何考えてるんだ！お前は！」「……………なんも」「ブアツカモン！だいたいお前は……………」「オイオイ、また始まったぜ。ボスの雷が」「まったく懲りないねーレオさんも」
職場が笑いに包まれる。

そんないい加減な保安官がレオ・ギャザリスだった。

続く

土の神ライダー 序章 その2

レオ・バレッタ。西の果てウエストホースで保安官をやっていた男。この大陸は賞金首やならず者のたまり場だった。そんな世界でスターと呼ばれ、恐れられた男。今日も目覚まし代わりに、ボスに説教を食らう。

「だいたいお前はだなあ！品格が無さすぎるんだ！少しは自覚しろ！」「ハイハイ。品格ね。わかりましたわ。ジャー、パトロール行つて来ますんで」テンガロンハットを被り直し、マントを鷲掴みにしながら馬にまたがる。「バレッタ。今日の依頼よ」「ホウホウ。なるほどな。南が騒がしいな。今日は北に行くか」「チツ……………チヨット！バレッタ！」「いいのいいの。どうせ事件が起こりゃ行くんだから。見回りと称して暇潰しな。付き合ってらんないよ。あんなボス」レオ・バレッタは馬を走らせながら後ろ手に投げキスをする。

「まったくモー……………どうするの？この依頼！」アシスタントはいつもの事と諦めた。

「今日あたり、新しい保安官が来るらしいけどまだかしらね。イケてたらつまみ食いね」

「ヤレヤレ。やっと巻いたか？厄介な依頼には付き合いたくねーもんな。まあ、いずれやる事になるさ。いずれな」

レオは北の小川にさしかかった。

「さて、魚釣りでもしますかね。オイ馬。お前も飯の時間だろ？その辺で適当にやれや」レオは馬から降り小川に向かった。

「キヤー！泥棒！誰かー！」向こう岸で女性の悲鳴が聞こえた。「何？泥棒？マテマテ。オイ！馬！行くぞ！」レオの馬は呑気に草を食んでいた。「ツタクモー！シャーネー行くか！」レオは面倒な事に巻き込まれるのは嫌いだが、目の前で起こった事には躊躇しなかった。小川を蹴り進み、向こう岸に渡り、高い木を三角跳びで登り、辺りを見渡す。

「さて、獲物は？……いた！あそこだ！」マントをたなびかせ、一回転して地面に着地し、残像を残して泥棒を追いかける。

レオの隣を黒い影が走り去る。黒い影は投げ縄を放り、泥棒を捕らえる。

「捕らえた！覚悟しろ！こそ泥！」男は馬を飛び降り、殴り付ける。

「マテマテ！失神している！やめるんだ！」息を切らしながら、レオが追いつく。「お嬢さん。もう大丈夫ですから。コレですよね。盗まれた物は？」泥棒の盗んだかごを手に取り被害者に見せる。「エエ。ありがとうございます」「アア、お礼は保安所まで」「エエ。解りましたわ」

レオは男を見た。

黒いバンダナに赤く長い髪。茶色いベストに投げ縄を片手に持った男。「初めまして。レオ・バレッタさん。僕はピート。今日付けで保安所に配属されました」「ルーキーか？よくやった。まあ、俺も馬があればお前より早かったがな。マア……あれだ、ハンディーだ。くれてやる。就任祝いだ」「ありがとうございます。ジャー保安所に帰ってますんで。また後で」ピートはペコリと頭を下げ、馬にまたがり、泥棒を抱えあげる。

「ピートか。ハンディーがあつたにしても、あの馬の乗りこなし。

縄を投げるタイミング。かなりのセンスだな。鍛えがいがありそうだ。マア俺も、就任当時は……………」ブツブツ言いながら自分の馬に戻る。

馬はお腹一杯草を食べ、呑気に昼寝していた。

「まったくこいつは。肝心な時にコレだよ！」

「オーイ。レオ！暇か？」林の中から大きな虎が出てきた。「おお。チャンク。散歩か？」「アア。なんでも強い熊がいるらしくてな。力比べさ。たいしたことなかったがな」「たいしたこと無いが、怪我してるぜ」「ナーニ。返り血さ」「そうか？手当てしてやるよ。マア来いや」

レオは親友チャンクの手当てをした。

「わりいな。いつも。熊肉いるか？やるよ」「アア。貰うよ」「二人は熊肉をかじりながら、馬を引きずり保安所に帰るのだった。

続
く

土の神ライダー 序章 その3

二丁拳銃を持つ保安官のレオ・バレッタと虎のチャंक。彼らはトポトポ保安所に帰るのだった。北の小川で偶然出逢った、投げ縄のピート。今日配属になった保安官らしい。

レオとチャंकは熊肉をかじりながら馬を引きずっていた。

「まったくこいつは。大事な時に昼寝なんかしやがって」「レオ。馬なんか置いてけよ」「でもよ、保安官って言ったら馬に乗って颯爽と走るのが筋だぜ。で、ビューッと飛んできて、バババツてやるんだ。わかるか?」「……………置いてった方が良さそうだぜ。ホラ、向こうに柄の悪い連中がいるしな。俺は手負いなんだから頼るなよ」

よく見ると木の木陰に数人の盗賊がいた。「アア。確かにな。暗くで見えないがどの位いるんだ?チャंक」「待ってる。今、分析中だ。……………賞金額5千が2人。武器はナイフを数本。襲った連中から巻き上げてみたいだぜ」「しめて1万か?飯の足しにはなりそうだな。お前の狩った熊肉なんかじゃ腹も満たないし。行けるか?チャंक」「回復率60。まあまあかな。やばくなりや例のアレがあるし大丈夫だろう」「よっしゃ行くか!丁度ルーキーに横取りされてムシャクシャしてたんだ。オイ、馬!起きろ!仕事だ!」レオは腹を蹴った。「だから、置いてけつて。気持ち良さそうに。甘やかし過ぎじゃねーか?」

レオとチャンクは盗賊に近づいた。

「ヨオヨオヨオ！レオさん！なあ、保安官さんよ。昨日はうちのボスコが世話になったみたいだな。釈放すりゃー見逃すぜ」「……………なんだ？あのヘナチヨコのダチか？たいした男だったよ」「なんだとー！テメエー！」盗賊の一人がナイフを向けた。レオは紙一重でかわし、乱れたマントを直しながら腰から二丁拳銃を回した。構えて、バーンバーンと二発打ち込む。

チャンクはもう一人の上を飛び乗り、爪を出して引つ掻く。二人はよろめきながら立ち上がり、指笛で仲間を呼んだ。気がつくのと辺りを囲まれていた。

「へ？チャンク。二人じゃねーのか？」「頼るなって俺を。手負いなんだから。間違える時もあるさ」「間違えるじゃ済まねえぞ！盗賊団なんて」レオはビュンと地面を蹴り、木にかけ上がり、旋回して二丁拳銃を乱射した。

チャンクは背中のアーマーから火炎放射器を出し、ジャンプしてローリングする。火の車の様に回りながら辺りを蹴散らす。

「チャंक！あとのくらいだ？」「待ってる！目が回ってる」

レオは残像を残しながら一人一人、撃ち抜く。あまりの数にジリジリと後退するしかなかった。

「レオ！アレだアレ！例のアレ」「オツケー！チャंक！アーマードバレッタ！リンクアップ！」

チャंकはバラバラになり、レオにまとわりつく。赤い炎に包まれてレオは両肩に火炎放射器を装備し虎の兜を纏ったアーマードバレッタに変わる。

「行くぜ！チャंक！」「いつも通り、三分だ。三分しか持たないぞ」

二丁拳銃で牽制し、火炎放射器で焼き尽くす。

あっと言つ間に、ほとんど打ちのめした。

「あと少し。……………アレ？アチャー」「タイムアップだ。俺は暫く使えないから一人でやれるな？レオ」「……………アア。任せとけ」
残りの盗賊団に走り込むレオ。

「チョットそこ！退きな！」上空から何者かが声を上げる。「女か？アブねえ！来るな」

大きな手裏剣を作り、横に投げる。

バーンバーンバーン。次々に倒れていく盗賊団。

「退いてなって。オッサン」

黒髪にクナイ構えた女が木の上に立っていた。

「大丈夫かい？アンタラ。怪我はないかい？」「アア……………ありがとう。助かったよ」「だから、無理すんなって。アタシャーミサト。

通りすがりのクノイチさ。ところでアンタラ、保安所はどこだい？
初めて来る場所だね」「丁度いい。俺らも行く所だ。一緒に行こう
」「アアそうかい？なら、頼むよ」「クナイをしまい、木から降りて
くる。

「あんた女だろ？なんでこんな稼業を……」」「金になるからだよ。
勿論、賞金は山分けだからね。アンタラが？。私が？だ」三人は保
安所へ戻る。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8838x/>

土の神ライダー 序章

2011年10月26日11時05分発行